

姫君の名は。



山 本 千 明

(英会話講師)

広州のホテルの窓から「令和元年」を告げる眩い光が差し込んできた。白く明けていく空を眺めながら私は日本に思いを馳せる。

「もう生まれたかな……」予定日は四月三十日。予定通りなら「平成生まれ」次の日からは「令和の子」となる。今のところ連絡はないが、こちらから尋ねることは憚られた。

「今年の連休に私のホームタウンに行きませんか」とお誘いを受けた。香川大学勤務の静雅さんと知り合ったのは六年前。艶やかなロングヘアーに知的な眼差しの彼女は、優しくて料理上手なご主人、何さんと保護猫ビニー君の「三人」で暮らしている。以前から何度かお誘いをいただきながら多忙を理由にお断りしてきたが、ちょうど主

人も定年後、人並みに休暇が取れるようになっていた。「行くなら今年の十連休」と私達はお二人の帰省に便乗させていただくことにした。幸い留守中のビニー君のお世話も共通の友人が引き受けてくれた。

いざ広州へ！

香港経由で静雅さんのご実家に到着したのは深夜だったが、手料理と中国茶でお父様の笑顔の歓迎を受ける。お母様は居心地の良いシックなホテルを予約してくれていた。

粥、飲茶、蒸し野菜に季節のフルーツ。彩り豊かな朝食を済ませると彼女のご両親がお迎えにきてくれる。ドライバーはお母様。娘さんと同じストリートヘアーに大きなツバの帽子がお似合いのスタイリッシュなママさん

だ。「六時間ドライブ」は「普通」だと聞いて驚く私と夫を乗せ、車は「桂林」目指してひた走る。夕刻にようやく目的地のホテルに到着。

翌日、五月二日は景勝地での川下り。筏仕様のボートは水しぶきをあげながら水面を軽やかに滑り、墨絵のような山々が両側に次々と現れる。さらに次の日はフェリーに乗船。少し高い視線からの「遊覧観光」。何気に船上からの写真をメールで東京に送ってみた。程なく着信音が鳴る。「桂林ですか？」という返信に続いて「昨日の午前五時から陣痛が続いています」との知らせ。慌てて「あと少し！頑張ってください」と打つと「(妻と)共に頑張る！エンジョイ桂林！」と返ってきた。

メールの相手、范くんと出会ったのは約八年前。彼の先輩が「面白い後輩がいいます」と紹介してくれた。当時の彼は二十二歳。香川大学農学部で「日本の食の安全」を学びに来日したばかりだった。日本語はほとんど話せなかったが彼の目標は「日本で就職する

こと」。大学で専門分野の研究をしながら夕食後は地元の飲食店でアルバイトを始めた。言葉が正確に理解できず、注文を聞き間違える度に先輩社員に怒鳴られていたらしい。そんなもどかしさをバネにして彼はバイト後も深夜まで日本語の勉強を続けていたという。

中国映画の俳優のようにきりりとした眉に少年のような澄んだ瞳。読書が大好き。英語が堪能。漢字を書けば書家のように達筆でピアノやアコーディオンも弾きこなす。多才で人懐っこい彼の周りにはいつの間にか「地元香川の友達の間」が広がっていった。日本語の能力も「友人の数と努力に比例して」飛躍的に伸びていく。

彼の将来の夢は「日本で就職すること」「日本で自分の家を持つこと」そして若者らしく「ランボルギーニを買うこと」だった。

現在、三十一歳になった范くんは、見事に夢を叶えて「日本の会社」で働いている。しかも東京で出会った愛ら

しい「エクボ美人」の王さんと平成三十年の夏に結婚。そして「来年パパになります」と嬉しい報告が来ていた。五月四日の午前二時四十五分「元氣な女の子生まれてくれた！ 時間遅いけど、どうしても伝えたくて躊躇しながら送っちゃった」と弾むようなメールが届く。

翌朝、共通の友人である静雅さんと何さんを交えての「おめでとう！」の寄せ書きを写真に撮って「范パパ」に送った。

それから五日後。「うちの子は『令雅』と名付けました。『静雅』と似てるネ」と范くんからの連絡。「令和」の「令」と「静雅」の「雅」？ と思いきや……生まれた日が偶然「スターウォーズの日」だったので「レイア姫」に因んで命名したと言う。映画の中の有名なセリフ「May（メイ） the Force（フォース） be with you.」

「フォース（特別な力）と共にあれ」の発音が「五月（メイ） 四日（フォース）」に重なるという理由だ。「令」の

字は「令和元年生まれ」を記念して。ただ「雅」は「静雅さん」の名前からではなく「れいあ」と読ませるための「偶然の一致」だったらしい。

元号改正の歴史的瞬間に、日本人の私と夫は中国で温かい「歓迎」を受け、ほぼ同時期に中国人の范くんは日本で新妻と、誕生を待ちわびていた「姫君」を「歓迎」していた。

昨年の十月。東京のカフェで初めて「令雅ちゃん」に会った。眉も目元もパパにそっくり。柔らかな笑顔はママ譲り。満面笑みの范くんは、なんと家族のために「東京の端っこで家を買った」という。

「次回は新居に遊びに来てくださいね！」と手を振り颯爽と乗り込んだ車は……「憧れのランボルギーニ」!!!ではなく、「ダイハツの軽乗用車」だった。

「これだけ変えなくなかった」と言う「香川ナンバー」の「范くん号」は大切な家族を乗せ、穏やかなエンジン音を響かせて走り去っていった。

信州上田の地へ



宮本富夫

(高松大学 名誉教授)

何年になるだろう。善光寺方面へ向かう「しなの鉄道」が上田駅に差し掛ると、私より少し年配の方が、上田城は徳川の大军を二度にわたって退けたのですよと、話して下さる。奥が深いですよとも教えていただく。このこともあって早春の上田の地へ。高松駅を早朝に出発、「のぞみ」、「あさま」と新幹線を乗り継ぎ、上田へ。約六時間の電車の旅、本当に便利になった。高校を卒業した年だったか、上田からそう遠くない松本を訪ねた。高松駅を朝出発、名古屋からの夜行列車が松本駅に着いたのは夜明け前。高松からはほぼ一日を要したと記憶する。

上田到着後、上田城跡公園へ。石垣が険しい、堀が深い。その規模に、防

御の工夫にただ驚く。奥が深いと聞いたことまで確認するには少々広すぎた。聞くと、公園とする条件で素封家が寄付された経緯があるという。このこともあって無料で市民に開放されている。堀跡には大きく育った櫟や桜、その下を散歩する市民の姿。かつての上田城を復元する努力が今も続けられているという。素封家の好意に報いる形で市民が協力して維持されている雰囲気を感じ、心地よい空間。塀で閉ざすのではなく、開放して維持していく一つの方法を学ぶ。

その後、「上田電鉄」で別所温泉に向かう。沿線ののどかな景観が広がる。今夜の宿は南條旅館。宿の方のいい湯ですよとの言葉に偽りはなかつ

た。温泉を独り占めする幸運の中、湯を楽しむ。学生時代の浩宮さまがここに泊まれたんですよと仲居の方が教えて下さる。出されたご飯が美味しい。米作りに取り組む身にうれしい体験。聞くと、「五郎兵衛米」と呼ばれ、信州産のコシヒカリ。佐久市の旧浅方村の産、粘土質の土壌で育てられているという。水はけの良い土壌で育つ米がうまいとする私たちの地域とは対極にある。いつの日か栽培地を訪ねたい。楽しみにしていた真田の隠し湯、「石湯」は、あいにくの定休日。早春の冷え込みの中、宿近くの「大師の湯」を楽しむ勇氣もなかった。「石湯」や「大師の湯」を楽しむことは次回に、少し暖かい時季にと、自らに言い聞かせる。

翌日、塩田平に、「無言館」を訪ねる。今回の旅の目的の一つ。美術館の雰囲気は外から感じられない。落葉樹に囲まれ、コンクリート打ちっ放しの建物。里山の丘に建つ。入口らしき正面の上に「戦没画学生慰霊美術館 無

言館」の表示、そしてコンクリートの壁。近づき、はじめて気づく正面左右の木製ドア。なんの表示もない。どちらのドアを押そうか、少しためらい、右のドアを押す。いきなり作品と向き合うことに。少し意表をつかれるも、展示されている作品に引き込まれる。空調がなく凜とした冷氣、光が制限された空間、傷みを抱える作品が心の中に染み込むように入ってくる。強い訴えとはかけ離れている気がするのに、妙に心に響く。不思議な感覚。少し落ち着き、左の入り口に目をやると、挨拶文や鑑賞順路の表示。左のドアだったのか。

夢を絶たれ、先の大戦で命を落とした画学生。どのような思いを抱き、作品を仕上げていったのだろうか。想像が頭の中を巡る。研ぎ澄まされた穏やかさ、そしてなんともいえないやるせなさを感じる。不思議な感覚を味わいつつ、作品の全てと対峙する。家族を描いた作品、ふるさとらしき風景を描いた作品が心に残る。

館内は十字の構造。壁に作品、通路中央に遺品などの展示。遺品は別の意味で、心に響く。母の遺品にあった、戦地の父からのハガキを思い出す。細かい字がびっしり。我が子への思いがひしひしと感じられた。十字の構造には慰霊の願いが込められているのだろうか。十字の交差部分は緩やかな盛り上がり、そしてその上部にひときわ高い天井。十字架を意味するのだろうか、聞き漏らす。出口にあった受付で、感謝の言葉を添え料金を支払う。

外に出ると、春先の暖かい陽光が眩しい。心にはぶつけようのないやるせなさ。夢がかなえられていたら、作品を通してどんな世界が展開されていたのだろうか。予科練に志願した叔父が、自分に関わる全てのものを処分して入隊に臨んだと、何気なく話してくれたことを思い出す。自分の意思でそうしたのか、それとも指示を受けてのことだったのか、多くは語らなかった。特別なものを残すことなく、大きな力に押されるままに、天命と受けと

め、命を投げ出さざるを得なかった人も多くいたことだろう。個人の可能性や見えない世界に価値を見出そうとしない大きな力に個人が押しつぶされざるを得なかった時代を想像し、このようないことが繰り返されることがないように……との思いを強くする。

上田の地にこのような美術館が受け入れられ、守られている。おかげで、訪ねることがかなう、感謝。大切なものを守つていこうとする雰囲気为上田の地にあるように感じる。車中で城について語りかける。城を守り、田を守る。新幹線から眺める上田平では、放置され、草ボウボウの農地は見当たらなかった。塩田平の棚田でも同様であった。ため池と棚田が織りなす、のどかな田園景観。かつての讃岐の里山景観と似る。こちらでは櫻と梅が少し目立つ。この秋、上田の地は台風に見舞われた。開設された避難所に、プライバシーを考慮した「ワンタッチパーテーション ファミリールーム」が用意されていたと聞く。

「さかもとふさ 型絵染アート」の

展覧会とワークショップを開催

さかもと ふ さ

（型絵染版画家、エディター
イラストレーター）

二〇一九年日本オーストリア友好百五十周年公式行事「さかもと ふさ 型絵染アート」展をギャラリーバイ デア オバーで、ワークショップは世界博物館と日本大使館で開催した。今年は八月三十一日から九月二十八日まで約一ヶ月滞在。ワークショップ等の準備もあり大変忙しい毎日であった。

九月五日展覧会のオープニング、それに備えて九月三日が絵の飾り付け、一日おいて、オープニング当日を迎えた。皆様を迎えるために十六時くらいにギャラリーへいった。十八時になると続々と皆さんがやってきた。ギャラリーに入りきれないくらいの人、六十、七十人は集まったと思う。ギャラリー内は熱気

で汗ばむほどになってきた。普段は浮世絵や国内外の物語作家の版画を扱っているギャラリーである。オーナーの挨拶にもあったが、初めて生存する作家の展覧会だ。ギャラリーとしても新しい一步を踏み出したのであろう。

私の型絵染アートは好評であった。複雑な社会の中で単純化された作品が皆さんの心をとらえたのではないかと、オーナーは話していた。オーストリア人の作品への関心と理解力の高さが、私はうれしかった。紙面のスペースの関係から次回も続けて、展覧会についてお話ししていきたい。



型絵染アート「ザルツブルグ風景」(オーストリア) さかもと ふさ

今村均陸軍大將と汪兆銘

宮地智子

(詩人)



平成三年（一九九二年）三月初版の渡辺昇一著『日本史から見た日本人、昭和編——「立憲君主国」の崩壊と繁栄の謎』が令和元年（二〇一九年）になって再び祥伝社新書として出版された。

この著作のなかで、汪兆銘の名が二回出てくる。ひとつは大正十三年（一九二四年）十一月五日、憑玉祥によって三時間以内に紫禁城から退去することを命じられた宣統帝こと溥儀に対して最も丁寧であったのが汪兆銘であったこと。もうひとつは昭和十二年（一九三七年）十二月十三日の南京陥落の直前に南京にいた人口はどのくらいであったか、という当時の証言を記述したうち、証言者のひとり、劉啓雄少将が、証言した二〇万人というのが最も多く、その人は日本軍の捕虜であったことと、のちに汪兆銘政府軍官学校長になった、ということが記されている。

昭和史を検証する極めて信憑性の高い、格調の高い歴史書である本書も、昭和三十五年に出版された『今村均大

将回想録』全四巻（自由アジア社刊）も、戦争というものの真実を追求するゆるぎない意志と、公正で深い洞察による人間愛に満ちた貴重な著作であるが両者の著作のなかに、コミンテルンによる工作活動についての記述が見られないのは、こういった研究が、日本ではかなり遅れているからだろう。

昭和十二年（一九三七年）七月に起きた支那事変でも、またその和平工作でも、すべては世界中に張りめぐらされたコミンテルンの諜報活動によっていかに誘導され、混乱を招いたか、その真相は近年、江崎道朗氏や林千勝氏などにとつて研究が進み、解明が進んでいることは大変喜ばしい。

一九四〇年（昭和十五年）三月に蒋介石政権を離れ、汪兆銘が南京政府を樹立した頃、今村陸軍大将（当時中将）は、南寧作戦を勝利に導いた後、教育總監部本部長として東京に戻っている。翌昭和十六年（一九四一年）一月には、陸軍大臣東條英機の依頼で「戦陣訓」の作成に当たった後、七月

に第二十三軍司令官として広東に着任した。

今から思えばその頃、もう既にコミンテルンの画策によって汪兆銘和平工作は失敗していたのである。

けれど、そのような事情も、また日本の軍の中央の画策も知らされていない今村大将は南京から面会にやつて来た汪兆銘を丁重に迎え入れ、さまざまの助言、協力をしている。

南京政府の顧問を委嘱されていた影佐禎昭少将（後の中将）を通じて面会した今村大将は、汪兆銘の印象を、まるで革命の大闘士とも思えない程の紅顔の美男であったことを記している。

この汪政権樹立については、畑統軍司令官からも知らされており、栗林参謀長と汪兆銘が協議することを、今村大将は認めている。

汪氏は直接今村大将に助言を求めて言う。

「三個師団からなる新しい一軍団を作るにあたり、その司令官を自分の妻の兄弟のひとり陳輝祖に就任させた

い。けれど彼は現在、広東省の省長ではあるが軍事方面には全くの素人であり、不安がある。当面、省長と軍司令官を兼務させたいのだが、この人物に文武の両職が勤まるものかどうか、忌憚のない御意見を伺いたい」。

通訳は支那語をよくする影佐少将である。

今村大将は、この広東省長である陳輝祖氏とは既に三回ほど面談もし、会食もしていた。彼は青年の時にアメリカに留学し、建築を専門とする工学博士でもあつて、軍司令官などという立場になることを躊躇していたのである。

特務機関長矢崎勘十少将とも意気が融和し、わが国を心から信頼している温厚な人柄である彼が司令官に就任することに、今村大将は賛成した。なぜなら、いつまた、蔣政権の策謀によって南京政府を裏切る人間がでてくるかも知れず、汪兆銘氏が、側近に身内をもつて当てたいのは当然のこととしたためである。理外の理、と今村大将は言い、まずは、しるる陳氏に馬を贈呈

し、朝一時間の稽古を一週間に三回、三週間続けることをすすめ、三人の部下に命じて特訓を行った結果、陳氏はみごとに腕を上げ、二か月後の観兵式には乗馬姿で新兵員の前に立ったのである。

けれどしばらくの後、汪氏は今村大將に訴えるのである。「中国人の私などの思いもよらないことですが、司令部参謀の幾人かは私が直接彼らの上司である司令官や参謀長に申し入れをしても途中で握りつぶし、『なぜ業務主管であるわれわれに通さず直接上の者に申し入れたのか』と言って私の政権の大臣や次官級の者を呼びつけとなりあげるのです」。

今村大將が答えて「そういう時は主席であるあなたが直接総参謀なり総司令官に会って、その参謀の名を告げるべきである」と言うと、汪氏が返す。「そのようなことをして、その参謀が内地に転職した後はもっと酷いことになります。もう日本の協力は望めず新政権の発展は諦める気になります」が、

けれどもし解散してしまつたら、一緒に蒋政権から離れた同志を見殺しにしてしまうことになります」。

この南京政権がまもなく歴史から消え去ったことは日本にとつてもまた、他の国々にとつても誠に不幸なことであつたことは、七十数年経た今にして判然とすることではないだろうか。

汪兆銘政権の立場を理解し、協力を惜しまなかつた西尾、畑両総司令官、板垣、後宮^{うしろぎ}両参謀長、栗林参謀長、今村大將などの、真に和平を望む、歴史の陰に隠れたその偉業を讃えたい。



妖魔悪鬼の地獄国（一）



池 田 一 貴

一 爬灰とは

爬灰^{はがひ}という俗語がある。日本語ではない。北京語である。パーホエイと発音するそうだ。爬灰とは、灰の上を這^はって膝を汚す、という意味。だが、じつは裏の意味がある。膝^{ひざ}（シー）と媳^{よめ}（シー）とが北京語では同音であるため、父親が息子の嫁を汚す（つまり姦通する）ことを意味する隠語となっているのである。ネット上の辞書で調べてみると、単に「（義理の父娘の）近親相姦」と表示するものがあり、身も蓋もない。通常、家長たる父親に迫られたら嫁は逃^{ふた}げることができない。パワハラか強姦^{かんかん}というべきだろう。

言語道断な行為だが、そんな破廉恥な醜態^{うしだて}がよしんば露見したとしても、父親の権威は重く、息子は父親を責めることができない。どんな事態においても、息子は父親に孝行しなければならぬという強い縛り^{はきり}があるためである。孝行とは、親を敬い、親に仕え、絶対服従することであり、反抗は許されない。二十世紀の初頭まで、中国（唐以下、宋・元・明・清の全王朝）では他人を殴ったら答^{こた}打ち四十回の刑を受けたが、親を殴ったら斬首刑に処す、という法律が適用された。「孝」に反する行為は重罪の報いを受ける。「孝」はあらゆる道徳や法律に優先する絶対至上命令だった

のである。

これが儒教である。

こんな事例もある。古代中国での戦争中のことだ。自軍も相当に疲弊しているが、しかし援軍が到着すれば勝利は間違いないと誰もが確信していた。敵軍は算を乱して敗走する寸前である。統制はとれておらず敵将はわずかな手勢に守られているのみだ。そこへ同盟国の援軍が十万の大軍を率いて間もなく到着するとの報せが入った。怒濤のような歓声が上がった。

しかし次に入ったのは、同盟軍が突然進軍をやめ、全軍引き返したとの報せだった。なぜだ。なぜ、この好機に……。急ぎ使者を走らせ、理由を問い質した。答えは、大将の父親が急死したとの訃報が入ったので、直ちに帰郷し、喪に服すため、とのことだった。

これが儒教である。

服喪のため引き返した同盟軍の大将は、死んだ父親にとってはすばらしい孝行息子であろうが、これが、すなわち国家間の盟約を破ることが、同盟国に対する誠意だろうか。日本人なら同盟者の誠意を疑い、裏切りに激怒するにちがいないが、儒教精神からすれば、「孝」のためなら同盟軍を裏切っても当然なのである。国家間の同盟や条約

など「孝」の前では一片の紙切れに等しい。われわれ日本人は、儒教を知っているようで知らない。

二 孔子と冥界

英語では、孔子のことをConfucius（コンフューシャス）といい、儒教をConfucianism（コンフューシャニズム）という。つまり英語では、儒教を「孔子教」とか「孔子主義」とか呼んでいるわけである。これは一面では正しく、一面では正しくない。日本でも儒教を一言で定義すると「孔子の教え」といわれる。広辞苑はもう少し詳しく「孔子を祖とする教学」と説明している。いずれにしても儒教＝孔子の教えという英語の発想と大差はない。

どこが正しく、正しくないのか、議論の森の中に踏み込むと、退屈で死にそうになるので、できるだけ分かりやすく解説してみよう。

孔子の死後、その言動を保存するため弟子たちによって作成されたのが『論語』という孔子語録である。

《子曰く、^{いは}学^はびて時にこれを習ふ、また説^{よる}はしからずや》

《子曰く、巧言令色、^{すくな}鮮^{じん}し仁》

《子曰く、吾れ十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順ふ。七十にして心の欲する所に従ひて矩を踰えず》

これらは人口に膾炙した有名なフレーズだ。日本人でも、この程度の言葉なら知っている人が多い。しかし、これらの言葉が、前述の「爬灰」や「同盟国裏切り」とどう繋がるのか即答できる人は少ないだろう。

それは後述するとして、まずは『論語』の主張するところを見てみよう。『論語』は二千年以上にわたって儒教の古典的經典として重んじられてきた。これを東洋哲学の精髓であるかのように称揚する人もいるが、本来の意味での哲学からすれば、これは哲学ではない。ただの処世術である。

古今東西の哲学思想に通暁していたドイツの大哲学者ヘーゲルは、『論語』を読んてがっかりしたそうである。「これのどこが哲学なのだ。孔子の名譽のためにも『論語』は翻訳されないほうがよかった」と。優しい人だ。

哲学なら、宇宙・世界や人間の成り立ち、本質、存在の根拠、死の問題などについて根源的な問いを發し、答えようとする。孔子と同時代のギリシヤ人（ソクラテスやプラトン）やインド人

（釈迦や六師外道）はそうだった。しかし、孔子はそうではない。

《季路》敢へて死を問ふ。曰く、いまだ生を知らず、いずくんぞ死を知らん》

（弟子の子路が死とは何でしょうかと聞いた。孔子は、まだ生もろくに知らないのに、死のことなんか分かるわけがなかるう、と答えた）

また、当時の中国人の多くが信じていた妖怪や鬼神の存在についても、触れるのを避けた。

《子、怪力乱神を語らず》

（孔子先生は妖怪変化や淫祠邪教、死後世界などの類については一切語らなかつた）

この言葉は原語で「子不語怪力乱神」という。後世、この言葉が世間に広く知られて、中国では

「子不語」と言うだけで「怪力乱神」を意味するようになり、『子不語』という本も出版された。

内容は幽霊や死神、妖怪変化などの話ばかりを集めたものだ。亡き孔子にとつては本意だろうが、これは人気本となっている。

死や冥界（あの世）について語ろうとしない孔子は、現代にも通用する合理主義者とみられることもあるが、孔子の政治理論にとつて死や冥界はまったく不必要なテーマだったから触れなかつたにすぎない。

三 理想社会は過去か未来か

日本には今も孔子や『論語』のファンが多いので、孔子に批判的なことを書くことと反発を喰らいそうだが、本稿は儒教の欠陥を指摘することを主眼としている。儒教には好い面ももちろんあるが、問題はマイナス面である。本稿では好い面には触れない。その点、諒とせられたい。

まず孔子の考えをざっくりと述べよう。

孔子は周王朝の力が衰え、大小の諸国が群雄割拠した春秋時代（東周時代、ほぼ紀元前八〜五世紀）、魯の国で政治コンサルタントとして名を上げた前六世紀の人である。

孔子は伝説上の名君、堯、舜や、文武周公の時代（周王朝）の政治を理想として称賛した。ずっと後の近代ヨーロッパでは（共産主義やユートピアなどの）理想社会を未来に想い描いたが、孔子は、理想社会は過去にあったとする。

なぜ、ベクトルが逆なのか？

筆者はこう考える。中国の人々は古来、「利」を第一と考えてきた民族である。打算的であり、現実的なのだ。人々を客観的に観察して、人間は利で動く打算的な存在だと断定したのは、法家の第一人者・韓非子であった。法家と儒家とは主義主張はまったく異なるが、人々の性向について

の見方は似ていた。孔子も《君子は義に喩り、小人は利に喩る》という。小人とは君子以外の人のことだから、大衆のほとんどは小人である。その人々は「利に喩る（＝敏感だ）」というのだから、一般の人々は「利で動く打算的な存在だ」という韓非子の認識と大差はない。

中国では、このような現実的な人々に理想を説いて「こうすれば理想の未来社会がやって来ますよ」などと説得しても、人々は動かない。あやふやな実現可能性に賭けたりはしないのだ。

しかし過去、実際に存在した社会を理想として説けば、あやふやな未来社会と違って確固たる実績があるのだから、信用されやすく、同意が得られやすい。だから孔子は、近代ヨーロッパとは逆に、過去に理想社会が存在したと主張したのである。筆者はそうみている。

その理想社会だった周では、仁と義の道を実践し、上下秩序の弁別、すなわち礼と敬が広く浸透していた、と孔子は説いた。

よって、今の乱れた世でも、支配者はみずから仁・義・礼・智・信の徳を実践し、王道（徳による政治）で天下を治めるべきであると主張した。これは支配者が武力で天下を取ろうとする覇道を批判し、徳の力で天下を治める徳治主義を称揚し

たものである。

孔子の思想を要約すれば、以上のようなものだったといつてよい。

四 述べて作らず

理想社会を過去に求めたことから、必然的に出てきたのが《述べて作らず》という学問態度である。

孔子は「古代の聖人たちの言葉を伝える」(「述べる」)だけであつて、「新説を創造するわけではない」(「作らず」)と強調した。孔子において「述べる(「祖述」)」と「作る(「創作」)」は、正反対の概念なのである。この言葉《述べて作らず》は後世、儒者たちを厳しく縛りつづけた。

儒教の弟子たちは、孔子の時代から現代に至るまで「先人(先師)の言葉を述べる」ことに努めるだけで、決して新しい考えを創造する(作る)ということがない。そんなことをしたら、儒学者として軽蔑される。学者の列からはじき出されてしまう。儒教関係の著書は過去、東アジアだけでも膨大な量におよぶが、そのすべてが、新説ではなく、先人の書の訓詁本や注釈本である。注釈本の注釈本も夥しい。儒者にとってそれ以外に正しい学問はないのである。

現代の中国や韓国・朝鮮で、学生の勉強や学者の研究の方法は、理系・文系を問わず、まず先人の学説を忠実になぞり、暗記することに全力をそそぐ。これは「科挙」の受験勉強で培われた学習態度である。だからノーベル賞に値するような新しい独創的な科学研究がなかなか出てこない。その理由のひとつは、「述べて作らず」という儒教の伝統精神に禍いされているからではないか、と思わずにはいられない。

五 カニバリズム

孔子の徳治主義の大前提となっているのが、親孝行つまり「孝」の精神とその実践である。社会を維持するうえでこれほど重要なものはない——中国人は古来そう考えてきた。

例えば中東のアブラハム系の宗教(ユダヤ教、キリスト教、イスラム教)は孤児・老人・病人・身体障害者など身寄りのない人々は、成員全体による十分の一税の供出等により共同体が面倒をみてきた。おそらく縄文時代以来の日本もそうだったであろう。地縁共同体が発達していたことが、それを裏づけている。地縁共同体とは、血族も他人も含めた地域共同体のことである。

しかし中国や朝鮮では地縁共同体が発達せず、

家族（拡大しても宗族）という血縁共同体しか支えがなかった。血族以外は信用できないという不幸な歴史を背負っているからである。不幸な歴史とは、敢えて書くが、食人の習俗である。英語でカニバリズム（cannibalism）という。中国ではこの習俗が古代から近代まで生きており、ことに飢饉時に顕著であった。ほかに復讐・快楽・医療等を目的とした人肉食の習慣が目立つ。

彼らは非常時、家族以外の他人を殺して食べたのである。食人が事実であったことは、桑原隲蔵（京大教授。東洋史学者。仏文学者・桑原武夫の父）の詳細な研究（実例多数）で有名である。西洋人学者の研究も含まれている。ネット上の青空文庫では無料でその論文が読める。

親孝行が社会維持の大前提であったということは、それ以外に公的な福祉システムが存在しなかったことを意味する。善意の救済システムを創設しようとしても、飢饉などの非常時には真つ先に他人に食べられてしまう社会では、安心して他人の善意に頼ることができない。だから血族の孝行に頼るしかないのである（それでも大飢饉時には「子を易えて食う」という慣行があった。自分の子は食べないが他人の子を食うのである）。

こうして、孝行を勧善懲惡の最高の旗印とする

イデオロギーが、中国・朝鮮に定着した。それが儒教なのである。儒教の孝という旗印にだけは、誰も、他のどんな思想も、反駁できない。

孝とは「生んでもらったことに対する恩返し」ともいえるが、中国での実態はそんな生易しいものではない。孝とは「子が親に対して負う一方的な義務」であり「奴隸的義務」なのである。子は一生この觀念に縛られる。また同様のことが次世代へと送られ繰り返される。これが世の常識となり、子らは幼時から深く洗脳されてゆく。

こうして公的福祉システムなき社会において、唯一、頼みとすべき家族内福祉システムが「孝」に強制された義務」なのである。

地縁共同体の公的福祉システムのあった中東や日本と、血縁共同体の血族しか頼れるものがあった中国とは、同じく親孝行といっても「孝」の意味と重みが全然違う。そのことを念頭に置く必要がある。

六 魂と魄

孝の問題と関連して重要なのが、魂魄である。日本では魂魄とひとまとめに言うが、元来、魂と魄とは異なる靈魂なのである。

簡単に言うと、人間が生きているとき、魂は心

として活動し、気を制御している。魄は体を司るいわば物質制御のたましいだ。魂は陽、魄は陰である。人間が死ぬと、魂は体から離れて天へ上昇する。魄は屍体にそのまま付着して埋葬される。これが儒教の靈魂観だ（孔子の、ではない）。

文字からもそれが窺える。鬼という字は鬼籍という言葉もあるように「死者の霊や死者」を意味する。それと云（雲の原字で立ちのぼる気）とを組み合わせた文字が魂である。つまり天へ立ちのぼる靈魂が魂なのである。

一方、死者と白骨とを組み合わせた文字が魄なので、これが屍体に付着したままの靈魂であることは一目瞭然だろう。ちなみに香港映画で有名になったキョンシーとは漢字で「殭屍」と書き、魂が昇天し魄だけになった亡骸を指す。魂なき屍体という意味ではブードゥー教のゾンビに近い。

魂と魄という二つの靈魂があることで、儒教社会では「死者に鞭打つ」という、日本人には考えられない刑罰が行われることがある。例えば、李氏朝鮮末期における改革者・金玉均の遺体に対するむごたらしい処刑が、その代表例である。

日本ではどんな犯罪者でも死んだら「ホトケさん」と呼ばれ、手厚く葬られるが、李氏朝鮮政府は、日本亡命中の金玉均を巧みな嘘で中国・上海

へと呼び出し、暗殺者に拳銃で射殺させた上、遺体を朝鮮へ持ち去り、朝鮮国内で遺体に対する残酷な凌遲刑を加えたのだった。その酷い処刑を知った福沢諭吉は、涙を流し、李氏朝鮮を「妖魔悪鬼の地獄国」と呼び捨てた。

（続く）



(表紙説明)

■徳島県立阿波十郎兵衛屋敷

徳島の人々は、何百年もの間、自然に寄り添う暮らしの中で、人形浄瑠璃という芸能を大切にしてきました。阿波十郎兵衛屋敷では、国の重要無形文化財「阿波人形浄瑠璃」を毎日上演しています。また、展示室では、阿波人形浄瑠璃の特色や木偶人形の展示をご覧ください。

所在地／徳島県徳島市川内町宮島本浦一八四
TEL／〇八八・六六五・二二〇二
FAX／〇八八・六六五・三六八三
開館時間／九時三十分～十七時

(七月一日～八月一日は十八時まで)

「酒林」随筆特集 第九十九号
令和二年一月一日発行
発行人 西野 信也
印刷所 株式会社 太陽社
発行所 西野金陵株式会社
高松市紺屋町九番地六号
高松大同生命ビル八階

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

〔本 店〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
〔高松本社〕
〒760-8544 香川県高松市紺屋町9番地6 高松大同生命ビル8F ☎087-826-4133
〔高松支店〕
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
〔土庄営業所〕
〒761-4121 香川県小豆郡土庄町湊崎甲545-1 ☎0879-62-0101
〔丸亀支店〕
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
〔徳島支店〕
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
〔松山支店〕
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
〔岡山支店〕
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
〔洲本支店〕
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
〔大阪営業所〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-4133
〔東京営業所〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-5543-4133
〔観音寺物流センター〕
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
〔多度津工場〕
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
〔琴平工場〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
〔金陵の郷〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

〔大阪本社〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
〔大阪支店〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
〔東京支店〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
〔名古屋支店〕
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
〔北陸営業所〕
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967

〔上海西野貿易有限公司〕
中国上海浦東外高橋保稅区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548

〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO., LTD.〕
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng
klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110
☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕
Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend.
Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA
☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社

四国・琴平